
短編の吹き溜まり

Alexandre Adams Elarde

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編の吹き溜まり

【Zコード】

Z2077BA

【作者名】

Alexandre Adams Elarde

【あらすじ】

一次創作短編もしくは中編の吹き溜まりです。一点突破的キャラクター造形でお送り致します。習作を兼ねる部分もありますので、お目汚しになることもあるかも知れませんが、何卒、温かい目で見守って頂ければ幸いです。

灰 -1 (前書き)

童貞は想像することしか出来ない。

この日。

3年前に結婚して、去年連れを亡くしました。

それは、冬の日でした。

雪の降り積む日暮れ直ぐの時間です。茜から紺に空の色が変わる、ちょうどその時間帯でした。

私は、その当時交際していた女性にプロポーズしました。
一人の歩き道に、横断歩道の向こうにその人を見たので、つい。
随分といきなりですが、私は叫びました。

「結婚して下さい」

そう叫ぶと、なかなかに可愛らしく怒った顔でこちらに小走りで歩いてきました。

その横断歩道はあまり人気のないところでしたが、私の声がそれなり以上に大きかったので、聞いていた人は多かったです。
今思えば、気まずくなることをやってしまった、と思います。

しかし、流石は我が恋人。

憤慨しながらもにやつきが浮かび、私の右頬を叩いたときは全力と
いうもので照れを表現してくれました。なので、鼻息荒く左を差し
出すと無視され、代わりに唇に接吻を贈られました。
所謂一つのマーヴェラスというやつです。

そうして、私は彼女と結婚することになったのでした。

私と彼女の馴れ初めは、大学時代からでした。

同じ故郷で生まれ育ったのですが、幼・小・中・高、とにかく違つと
ころく。

そして、なぜか偶然県外の大学で知り合つに至りました。
彼女と自分の関係は、所謂サークル仲間で始まりました。
如何わしい活動もない、健全なサークルです。

当然です。盆栽サークルでしたから。皆真剣です。特に変わったこ
とも有りません。

彼女には初恋、と言つものが有つたそうです。

それを聞かされたのはある程度親密になつてから、余計なことを言
えば、私が彼女に惚れてから3ヶ月頃です。惚れたきっかけはささ
いなことで、風になびく長髪に、不覚にも見とれてしまつたことで
した。

とても絵になる瞬間でしたとも。

縁深まる夏の日の一瞬の風でした。

風が吹いたので、私は作業を一旦止めてしまいました。

その時、しゃがみ込んでいたのですが、立ち上がり伸びをしました。

視界の端ではなく、真ん前直線距離3mほど。

そこに彼女は居ました。

左横顔が見えました。

耳の形もよく、鼻筋も非常に美しく通り、なかなか高い。
髪は長く、前髪は真ん中で分けられていきました。

一瞬でした。

風は一息吹き、私は永遠に囚われました。

注意一秒恋一生。

ああ、なんという事でしょう。

話を戻しましょう。

初恋の人の話を、酔つた彼女から聞きました。

その日は成人を迎えたばかりの何人かで飲み屋に行つたのです。

男3人、女3人。

合コンというやつなのでしょうか。

しかし皆顔見知りというかサークル仲間でしたので、そういうことにはなりませんでした。

私はザルという、とてもアルコールに強い人間だったのでほとんど酔つていなかつたのですが、彼女は赤い顔でご機嫌。他の4人もそれよりひどい有様か、さらに酷く機嫌が直しい。そこで、半ば愚痴のようにいきなり唐突に聞かされたのが、初恋の人についてのお話でした。

「その人はねえ、あれあ確かにやがくの6年くらいかなあ」

「うーん、なんというかねえー、うん、男はつらかったよーって感じの人だつたねえ、えへへ」

何と変わった初恋でしょ。

所謂灰になつたような中年に惚れていたわけですから、正直に言うとショックです。

私は愕然としました。控えめに言うと死にたくなりました。まだ若い上に燃えている最中でしたから。

彼女の好みには合わない人間であることを、嘆きました。やけになつて手元にあつたビールをいきなり一気飲みをしてみたので、流石に急性中毒になりました。

油断した上に精神力もダメでしたので仕方ないことです。

病室で起きると、彼女に叩かれました。
右をやられました。至福です。

なので笑顔になると、彼女は少し驚いた顔になり、次に怪訝な表情を見せました。

また殴られました。それでも笑顔なのでまた。

どんどん気持ちよくなり、天にも登るような気分でしたが、登り切る前にお預けを食らつてしまつたのがそれなり以上の苦痛でした。初恋相手からの贈り物は、どんなもので嬉しいのです。たとえそれが悪意だとしても、痛みだとしても。私はその人を愛さずには居られなかつたのです。
……悪意は言いすぎですね。

灰 - 2 (前書き)

筆者の女性経験は皆無である。

それから、私はあの人にはどう告白すべきか考えるようになります。そのうち、まだ好感度が足りないぞ、と気付き、ビットアップローチすべきかを考えるようになります。

まずは攻めの一手です。

話の続きを聞いていなかつたので、続きを聞きたい。そのようなことを彼女に言つて、続きを促しました。それが病院に担ぎ込まれた一日後です。

雪のよく積もつた晩の、次の朝でした。

「うん、昨日会つたんだ、今年も

なんと、現在進行形でしたか。
これは勝てない。

愕然としました。控えめに言つと、その中年を過去に戻つて轢き殺したいほどに。

そんな私の心はござ知らず、話は続きます。

「実はね、毎年同じ日、同じ時間、同じ場所でだけ会えるの。何故か分からぬけど、気がついたらその人は隣にいてね」

何だか非常に運命的ではありませんか。
最早これまで。

ですが彼女の手前、もう一度急性アルコール中毒になるわけには行きません。流石に見放されます。
そもそも酒も手元にないので此。

その場を誤魔化す手段もないまま、話を聞き続けなければなりません。

しかし、語る彼女の笑顔が命綱となり私をつなぎとめました。

今思えば、切ってやりたいです。

「うん、この前言つたっけ？小学6年生の時、ちょうど昨日の晩。あの日も、雪が結構降つてねー。不思議だけど、毎年同じくらい降るのよ、その日は。それで、巻差して信号が変わるの待つてたのよ。そしたら、いきなり隣にその人が現れてね。あと、その信号が、変わるもので結構時間かかるのよ、3分くらい。まあ、気にする必要なんて無いくらいしようもない場所なんだけど。結構真面目な子だったのよー私。毎日毎日なつがーい信号待ち。……なつがーいつて言つほどじやないか。三分だし。んー、来年カツラーメン持つてつてあげようかな」

どうやら長い話になりそうでした。

実際は長く有りませんが、15秒でも堪えられそうにない自分としては十分以上に長く感じられました。

死ねそうです。

しかし、笑顔が素敵すぎて生きさず殺さずの状態です。

慣れてくるとこの鬱さ加減が癖になつてきました。息が少々荒いです。

ちなみに彼女はと言つと、所謂『入り込んでる』状態でしたので幸いにも気づかれませんでした。

「で、実はね……そうだなー、2年くらい前かな？うん、一年だ。ちょうど高校3年だつたや。その人にね、告白してみたのよ。何でだろ。毎年会つてるだけの全然知らない人なのにね」

殺す気なのではないでしょうか。

笑顔も何だか、はにかみが入ってきて更に素敵です。
逆に笑顔の方に殺されそうです。

そもそも、何故話してくれたのでしょうか。
それを少し聞いてみると、ええ、微妙な気持ちになりました。

「うん、似てるの。あんた」

どうしようと。

灰 - 3 (前書き)

「」の男、変態である。

.

ちなみに振られていたようでした。

安心。

その憎つき中年曰く、

「君にアホみたいに惚れ込む人間が現れたらそつちに告白したらどうだい」
とのこと。

何ですかそれは。
あてつけですか。

いいでしょ、やつてやりましょ、つべ。

アプローチ開始です。

まずは、相手を知るべきでしょ。

彼女は盆栽好きです。

ええ、私も盆栽好きです。

同じサークルに入っている時点でもう既に条件は満たしています。
別に変わったところはありません。

ふと思いました。

ひょっとしたら、彼女は中年好きなのでしょうか。

オジン趣味なのでしょうか。

枯れかけたのがええのんでしょうか。

回りくどく聞いてみると、どうやら察してくれたようで、答えてくれました。

「いや、多分その、特別なんぢゃないかなあ……あの人だけはさ

畜生。

いや、もしかすると自分も守備範囲内かもしません。

良かった。

しかし、問題はそこではありません。

もっとも重大です。

癪です。悔しいです。でも聞かねばなりません。
仇敵の靴を舐めるような屈辱です。

親の仇に跪かねばならぬ心持ちを想像していただきましょう。

あなたはそれを初めは知らない。

そう、あなたはその仇に救われた、よう見せられているのです。

その仇はあなたを見て笑っているのです。

利用価値を見出し、その利用のために飼い慣らしていくとするのです。

そしてついに靴を舐めても苦と思わぬ蛆虫にまで墮とされ、最終的にネタバラシです。

「お前の親を殺した相手の靴を舐めるのはどういう気分だと」

ええ、屈辱でしょう。最悪の気分でしょう。

殺してやりたい。しかし一度自分は跪いている。屈服している。どれほどの屈辱か想像できましょうか。

私は想像できますとも。ええ、親不孝者ではありませんもので。例えとしては控えめですとも、はい。

それはそうと聞きました。

「あの、僕にどう似ているんですか」

「ああ、あのや。」この前ぶつ叩いたじやん。ほっぺ。そういうえばまだ謝つて無かつたや、「ごめん。えへへ。許して?」

いいですよ。

むじろもつとやつてください。

続きを促します。

「その、あんたさ、何故か笑ったじゃん。あの時、びっくりしちゃつた。それが似てるのよ。なんというかその、さ。本当に嬉しそうな顔しててさ。あの人のそれにやられちゃつたといつかねえ」

気持ち悪いという感想は無かつたようでした。

流石女神は格が違います。

しかしまだあの中年の話です。

死にたくなります。

ええ、いつも通り彼女の笑顔を保養に相殺します。その時も素敵でした。

といつわけで、私はよく笑うようになりました。

練習はしません。自然ではなくなりますし、もし間違った練習だつたなら、無価値どころか負債になりますから。

現金な男と笑えば宜しいかと思います。

しかし、どうしても気を引きたいのです。

初恋でしたので。

灰 -4 (前書き)

これを書いていて酷く惨めになる。

そのうち、仲良くなつて来ました。

どれくらい掛かつたか、具体的に言えば7ヶ月くらいです。必死でした。

見放されないよつと、好かれるよつと、愛が徐々に伝わるよつと、時には我慢、時にはアグレッシブにアプローチを掛けてしまいました。ええ、笑顔は忘れません。

自然でないわけではありません。幸せが湧いてくるのですから、その心の動きに顔の筋肉を任せていればいいのです。

我慢をしないのは打算有りきでした。

しかし、笑顔そのものは全く混じりつ気なしの心からものであつたと言い張れます。

ええ、下心は純粹な内に入りますとも。

夏です。

またやつてきた夏です。
厳密に言えば残暑です。しかしその年も厳しい暑さが残つていました。

前の年のその頃、私は彼女に惚れたのです。

また、同じような作業がありました。

当然です。植物を扱うのですから同じ時期に同じような作業をすることに何らおかしいところはありません。

しかし、これほど出来過ぎた日もありません。
構図が、同じだったのです。

彼女が私の前に立っています。

私はしゃがんで作業を続けています。

風が吹いたら、私は立ちます。

私は立ちますが、風になびく彼女の長い髪の毛、それに惚れ直します。

惚れ直した勢いで、告白するでしょう。

そして、そのままか、同じ風が吹きました。

彼女は、前の年と同じく、風に向かつて立ち、長い髪をなびかせていました。

同じようですが、少し違います。

あれから一年経ちました。彼女はまた美しくなりました。

化粧もより上手くなつたように思います。眩しいです。それでも刮目します。見逃せません。

愛する人の美しい姿を見逃して何が片思いか、どうしてそれで懸想していると言えるのでしょうか。

視線を合わせられなくともその目を見つめていたいと、しかしそれではどうしても視線が合つだらう、それは恥ずかしいと、いやしかしそれでも見つめたい、どうしようもない悩みが頭を回らないのであれば、そんなものは本物の恋などではありません。ただ恋に恋しているだけでしょう。しかし私は初恋です。言つてしまえばこれが本物かどうか判定しようがありません。しかし、それでも、これが恋なのだと信じています。

涙が溢れました。

あまりに愛おしい、美しい。何で素敵の人なんだろう。もう、この人を見つめていられるなら、この人に見つめていてもらえるなら、それだけで生きて行ける。その気持を、素直にぶつけました。

「好きです」

なんというか、酷く青臭いように思えます。

なんせ私は初心者です。恋愛に関しては赤ん坊同然です。小学生以

下です。

この時まで色々策を打つて来なかつたわけではありませんが、あまりに稚拙でしょう。

ですから、バレバレだったわけです。

「今更だねえ」

回りには実は仲間が居ました。盆栽サークルの仲間です。

人の目など気にしない。

私の恋に関する基本方針がそれだつたと、今思い返して気付きました。

「うん、私も結構好きだよ」

あれ。もしかしてライクでしょうか。

こちらのラブに気付いて頂けなかつたんでしょうか。

出直しですか。もしかしてやり直しですか。

いいえ、まだ思いの丈の全てを語るには余りに序の口です。

こんなものではないのです。私の思いはそんな軽いものじゃないのです。重いのです。

「あなたの何もかもが好きです」

ええ、控えめに一言で纏めてしましましたが。

「……うん、分かつたから……その……一度も言わなくとも分かるよ」

顔が赤いです。ひょっとするとちゃんと意図が伝わっていたのでしょうか。

「私も、あんたの事好きだよ」

目を見てもう見えませんでしたが、うつむいて恥ずかしそうです。
ああ、死んでもいい。

貧血で私は倒れました。

医務室で田覚めると、右頬をまたぶつ叩かれました。
ここは天国なのでしょうか。

また笑顔になります。左を差し出しましたが、抱擁で返されました。
私も遠慮遠慮がちに抱きしめました。
彼女の情熱を免罪符に、私も途中から熱くやってしましましたが。

私は、その時からあの時まで、ずっと幸福でしたとも。

灰 - 5 (前書き)

友人によるとこれはギャグである。

そこからの話は特筆するべき」としかあつませんでしたので割愛しますよ。

私にとっては彼女さえ居れば最高なのです。

ええ、この上ないほど。たゞ

彼女が私を愛してくれるというもう幸福のあまり卒倒しそうな状態というのは、ずっと続くのだと思いました。

倦怠期など有りません。私は常に自身に攻めます。いつでもそういうでした。

そして、そんなこんなで大学4年の冬、帰省しているときに結婚に漕ぎ着けました。

それから、毎年結婚記念日に再現をやうやく、という話を持ちかけました。

例によつて殴られました。飽きません。私は彼女を愛しています。

愛の一撃を受けることが生き甲斐の一つといつても過言ではありませんでしたから。

私も彼女も、帰郷して地元で就職しました。

もちろん職場は同じです。

同じ職場で働くように骨を折りましたが、苦ではありません。

むしろ、彼女の方に迷惑を掛けた気もします。

笑つて許してくれたので気にしません。気にするなと言われた以上気にするわけには行きませんでした。

結婚一周年。ついにその口がきました。

台詞は変わつてこます。流石に毎回「結婚して下せ」はおかしい

でしょう。

一年周期で寄りを戻していのうで周りの人人が心配をしてしまいます。

ですので、「愛しています」と私が横断歩道の向こうから叫ぶのです。

信号が変わった直前に叫ぶので、変わったら直ぐ彼女が渡ってきて私を殴ってくれます。

ええ、幸せですとも。口付けもセットで付いてきます。

まさに黄金体験でした。

私の愛はそもそも死んでいませんが、やはりその日を迎えるに燃え盛るようと思えました。

年が明け、また夏が来ました。

その頃、彼女が妊娠していると分かりました。まさに幸せの絶頂を極め、そつ、所謂有頂天でした。

仕事にもさらに熱が入ります。

彼女が見ています。見てくれています。

彼女が頑張っています。私だって頑張れます。だから頑張ります。毎日全力です。社会人としても夫としても全身全霊、次はお父さんになるのだと思うと、身の引き締まる思いです。

結婚一周年。

私は忘れません。

まるで、静かに蓋が閉じるよつて、彼女が地面に振り下ろされたあの光景を、覚えていないはずがないのです。

彼女からほとばしる赤が、道路を静かに流れて、染めていくのを、忘れられるはずは無いでしょう。

地面が凍っていたのです。

彼女が身重だつたのです。

信号が幾分異常だつたのです。

トラックのブレーキが間一髪の瞬間遅く、効いたのです。

私のプロポーズが、彼女の到達を待つ、そういう形だつたのです。

それらが、いけなかつた。

灰 - 6 (前書き)

注意一 秒恋一生が友人にバカウケである。

彼女は死にました。

お腹の赤ん坊も一緒に。

私も、死にたかった。

あの時、私もその場で倒れました。

脳卒中だったそうです。

ショックで血管が切れたようでした。

気づきませんでしたが、過労が祟ったようです。

それでも。

誰も、私の右頬を叩いてくれませんでした。

誰も、私を抱きしめてくれませんでした。

誰も、私に口づけをくれませんでした。

そのまま、死ねれば、よかったです。

夢を、みました。

横断歩道にいます。隣に、彼女がいました。

私は地面に張り付いたように立ちぬくし、彼女は歩きだしました。

向こうにいくのです。

信号は青です。渡らなければなりません。

彼女は、一度私に向かって振り返りました。

名残惜しそうに、済まなそうに、愛しそうに、憐れむよう、この

上なく切なそう。

いきました。

私は泣いていました。

ただただ、泣いて、その背中が掠れて消えるまで、見ていました。
声を上げて、赤ん坊のように泣いていました。

目覚めると、病院でした。

両親、彼女の両親、皆揃い踏みでした。
でも、彼女は居ませんでした。

みんな泣いていました。

私が一番泣いていました。
しかし言葉が出ません。

出ないです。

私は、言葉を失いました。

愛していると言ったのに、結婚してくださいと言つたのに、好きです、あなたの全てが好きですと言つたのに、それが最初から無かつたかのように、私から言葉が消えました。
リハビリをするつもりはありませんでした。

私の言葉に何の価値があります。

彼女には、もう一度と言葉を届けられません。

右足と左手が麻痺しました。

それでも、リハビリをするつもりはありませんでした。

私は仕事が出来なくなりましたから。

頑張る理由もありません。

歩く意味もありません。

彼女は、もう私を見てくれませんから。

私の眠る間に、彼女は煙となつて天へいきました。

私は、いけませんでした。

トラックの運転手は、通夜にも葬式にも出てきたそうです。

本当に誠実な方だったそうです。

トラック側の不備でした。彼に落ち度は無かったと言えます。
賠償は、彼の雇用主である企業と彼の折半で行われました。

私が目覚めたと聞いて、真っ先に私の下に駆け付け、ええ、見事な土下座でした。立派な謝罪でした。

許せない。仇です。しかし、恨めないのです。

彼は、あまりに誠実だったのです。

責められません。責めようとしたところで言葉がありませんでしたが。

恨みを糧にすることも、私には出来ませんでした。
そうすれば生きて行けるかもしれない、そう考えたことを後悔しました。

私は、もう笑えませんでした。

私は、全てを失いました。

あんなに愛したあの人を、失いました。

私の全てを、失いました。

死にたかった。

灰 - 7 (前書き)

これはタイムリープものである。

それから、私はすっかり老けこみました。

髪の毛は、じつそりと抜けることはありませんでしたが、もう全部白髪でした。

体は衰えました。

右足が麻痺していくなくても、もう歩くのが精一杯でしょう。

灰です。燃え津です。もう、火の付くはずもありません。

私は、賠償金と親の金で生活する、言つてしまえば穀潰しになってしましました。

私と彼女の貯金は、葬儀代とベビー用品で消えていました。

私が、払うと言つたので。

庭先にあつた、彼女と私で世話をしていた盆栽も、すっかり荒れ放題です。

なので、この前父が世話をしてくれました。

でも、私はそれを見ているだけで辛かったです。

それでも、辛いからと言つて打ち壊してしまつのは、余りに虚しきて、そのまでした。

世話をしてくれた父にも、申し訳が立ちませんから。

私は、庭先に座り込み、宙を見て日々を過げました。

それでも、私たちの両親は見捨てませんでした。

それは、余計ではあるものの、有り難かったです。

妻と子供のお墓には一度も行きませんでした。

しかし、どうやらラックの運転手だった方と、その当時の雇用主

が、毎月参りに来ているのだと、それを両親たちから聞きました。

私が立ち直れない一方で、彼らはなんとか立ち直り、ひたすら懺悔を続けていました。

申し訳ない、と思いました。

あんなに謝られて、それでも何も出来ない私は、彼らの謝罪に報いることが出来ていません。

そうですが、私はそのまま灰のままであり続けました。

冬がやつてきました。

私は、さまよい歩くようになります。

何故だったのでしょうか。

彼女の面影を追うながら、もっと早くても良いのですし。

ですが実際私は夜毎に杖を付き、ハット、コートを引っ掛け出かけるのでした。

夜とは言つても、そこまで暗くはありません。

西の空に朱色が滲むくらいの明るさではあります。

紫の空が、毎日私を見下ろしています。

私は歩くのが遅いです。

左の足で一步を踏んで、右の足は引きずつて。倒れないように、動く右の手の杖で支えて。

そうしてやつと、妻のいたところにたどり着くのです。

私は、そこですかと立っています。

長いこと、毎晩立っていました。

彼女が死んでから、ちょうど一年の日でした。

三度目の結婚記念日です。

私は一人です。

あの横断歩道に、立っていました。

私は渡りません。向こうへは行きません。

ただ、彼女の最後に立っていた場所に、私も居るだけでした。

空が、紫色です。

西は、茜色です。

東はもう、紺色でした。

雪は降り積み、白は深かったです。

いつの年と比べても、同じようでした。

ふと、場違いだ、と思いました。

何故でしょう。でも、私は、ここにいってはいけないと思いました。
ここにいってはいけないのです。私はここにはいないはずなのです。
居てはいけないはずは、ないのですが。

私がさつき見ていたよりも、真新しい街並みが広がっていました。
何も変わっていません。ただ、何となく私が知っているよりも幾分
ほど新しさがありました。

となりには、傘を差し、ランドセルを担いだ女の子が立っていました。

信号は、赤です。

変わるものでは恐らく、そう。

3分。

灰 - 8 (前書き)

この短編は極普通の内容である。
月並みな展開で申し訳ないと思つ。
3日で一万字を突破している。

・・・

3分の出来事でした。

女の子が、私に気づきました。
いきなりその子は現れました。
気づいたらそこに居たのです。
私は驚きました。

だから、当然のじとく、その子も驚いたのです。

「……わ、おじさん……いつからここにいたの？」

無遠慮におじさんと呼んでもらいました。

おじさん、と来ましたか。

仕方ありません。まだ、25歳だったのですが、些か以上に老けこんでいましたから。

答えました。

「うん、おじさんはね……ずっと、ここにいたんだ」
「ずっと……？不思議だね、私が信号待ち始めたら、こきなつ出て
きた感じするけど」

私も凄く不思議に思います。

ずっと立っていたいきなり風景が微妙に変わったのですから。
そして、女の子がそこにいたのですし、私にもわけがわかりません。

「僕もね、びっくりしちゃったよ。気がついたら君がいきなつ出て
きたみたいに見えたから」

「ふーん、不思議だねえ」

女の子が、私と顔を見合わせて、笑いました。

その子は、真ん中で前髪を分けた、髪の長い女の子でした。

なんだか、あの人を思い出します。

あの人との笑顔と酷く似ていて、あの人を思い出して、あの人居なくて寂しくなつて、あの人どこにも居なくて、と思つてしまつて、辛かつたです。

でも、何故か、あの人また私に笑いかけてくれているようで、嬉しかつたのです。

私は、一年ぶりに笑いました。

彼女の好きだった、私の笑顔は、そこにまた蘇つていたのでしょうか。

何故か、その女の子がまじまじと私を見つめていました。あの人見られてるようで、ちょっと寂しくなつたり、悲しくなつたりしますが、

あの人見てくれているような気がして、単純で現金ですが、幸せになつてしましました。

私は、また笑つていました。

「どうしたんだい」

「あ、うん、その、なんでも、ない……うん」

うつむいて、私から視線を外しました。

何から何まで、似ています。

彼女を思い出します。

私の愛したあの人を思い出します。

私の全てが、そこにいるような気がして、胸がつまりました。
でも、なんだか、この子は違うはずなのに、あの人があそこに居るみたいで、胸がいっぱいになりました。

「おじさん、何か悲しいことでもあつた?」

唐突に、そう聞いてきました。

私たちは一人とも、信号の赤を見つめています。

「……僕の好きな人が、ここでつなくなっちゃったんだ」

「ふられちゃったの?」

「いや……違うんだ、その……事故だった」

傷がえぐり出されて、心が痛みます。

すきすきと痛み、じくじくと染みて、じくじくと心から何かが流れ
出て行く感覚です。

「あ……ごめん、なさい」

その子は、そう言つて、申し訳なさそうな抑揚で言いました。

氣まずい沈黙が流れます。

視界の端で、黄色の色が見えました。
もづすべ、信号が変わります。

「おじさん、また会える?」

何故か、その子がそう言つ出しました。

私は、答えに窮しました。

会つたことのないその子に、また会えるのか。
正直、会えないだろうと思いました。

私は、今までずっとここに立っていました。
ずっと、この子を見かけませんでした。
だから、恐らく一度きりでしょう。
しかし、私は冗談を言いました。

「やうだね、また同じ日の同じ時間なら、会えるかも知れないねえ」

その子は私のことなんか忘れます。
一年もしない内に忘れるでしょう。

でも、私は間違いなく、来年もここに居るでしょう。

そう言つたのと同時に、信号は青になりました。
彼女は渡ります。

歩き出しました。

そして、真ん中あたりで振り向きました。
何があるのでしょうか、と思いましたが、

「おじさん、またね！」

傘を持つ右手と逆、空いていた左手で小さく笑顔で手を振つてきました。

彼女はまた前を向き、その横断歩道を無事渡りきました。
私の左手は動きませんから、ただ、笑顔が見えてくれるといいな、
と思いながら、笑つて見送りました。

彼女の姿が、掠れて消えるまで。

涙が零れないように、久しぶりの笑顔で、見送りました。

彼女の姿が消えた時、私は、またあの人のいた場所にいると気づきました。

私は一步も動いていません。

あの子の足あとは隣にありませんでした。

とても、不思議な夜でした。

私の言葉も、何故か、戻ってきていましたし。

灰 -9（前書き）

- 夫婦の憤りを見かけたのがこれを形にするに至るきっかけである。
- 灰になるほど熱い恋心が欲しい。

それから、私は毎年、同じ日、同じ時間にそこに立つことにしました。

妻を偲ぶ思いもありました。

しかし、あの子との約束を形だけでも果たしてみようか、と、変な気まぐれを起こしたのです。

ちなみに、主治医によると私の失語は心因性だったのではないか、とのことです。

脳卒中による手足の麻痺との合併症状ではなかつたようです。

私は、やはり灰でした。

燃え津ではありましたが、また、盆栽の世話をすることになりました。

父母は、それを色々な思いで見ていたでしょう。

コスモスの「精霊流し」でも歌いながら世話をしてみようかと思いましたが、生まれるはずだったあの子がいませんから、余計に悲しくなると氣づき、「ワーキングソング」としては不適である、と思い至りまして、結局黙々と作業をすることにしました。

足がダメでしたから、あの頃のようにしゃがんで作業することはできませんでした。

丸椅子に座り、台の上に鉢を乗せ、なんとか片手で手入れをしました。

そういうわけで、リハビリをしてみようか、と思つたわけです。

せめて左手は添えられる程度には動けば、と。足のことば、特に考えていませんでした。

リハビリが効果を見せ始めたのは、奇しくも残暑の頃でした。

私の全てが始まった、そんな時期です。

ですから、墓参りに行ってみよつ、と思ひ立ちました。

その日は麦わら帽子を頭に載せ、靈園まで歩きました。

左で踏み込み、右は引きずり、右手に握った杖で体を支え、地面を鈍く削りながら滑るよつと歩きました。

妻の墓は、綺麗でした。

念入りに手がかけられており、雑草も確かに生えてはいたものの、除去の努力が見て取れます。

墓石には、私たちの苗字と、彼女の名前が彫りつけられていました。私はそれを、右手の人差指でなぞり、愛に思いを馳せました。

ひとりじとをつぶやきます。

彼女のかけらが、目の前に収められています。

言葉は届きません、でも、届いて欲しいと願つて、つぶやきました。

「今こに来ました」

それだけ言って、それだけなのに、私は涙が止まらなくて、もう、どうしようもなくて、墓にすがりついて泣きました。

麦わら帽子はずり落ちて、太陽は私の頭を、顔を、涙を容赦無く照ります。

杖は傍に落ちています。消えかけた琥珀色の光沢に光が反射していって、それのせいで頬を緩くつねられるような熱さも感じていました。その日は、誰も回りにいませんでした。

特に命日だったというわけでもありませんでしたので、あの一人も来ていませんでした。

ひとりしきり泣くと、私はこの間の結婚記念日のことを報告するのをしました。

不思議な不思議なあの日のことを。

報告が終わると、私はなんとか立ち上がり、立ちあぐらがしながらも何とか家にたどり着きました。

私の心に、何か、ほのかに温かいものが湧き出してくるのを、あの不思議な日から感じていました。
それは、燃え津だつた私の中から感ぜられ、それほどこゝか尊そすうじ
感じていました。

灰 -10 (前書き)

段々適当になつてきている。

また、結婚記念日がやつてきました。

やはり、私は一人でした。

しかし、とある女の子との約束もあります。

私は、前の年と同じように横断歩道の前に立ちました。

空は、やはり茜色でも、紫色でも、紺色でもありました。
雪も深く降り積もり、それに重なるように現在進行形で降っていました。

した。

信号が赤になると、また、景が不思議に変わります。
そして、隣を見れば今回も女の子が居ました。

左手で傘を差し、右手でカバンを持っています。
セーラー服でしたので、中学生かと思われました。
高校生にしては少し以上に幼気がありましたので。
その子が私に気づきました。

「……おじさん…」

去年初めて出会った、あの子でした。

少し大人びたように感じます。

私は、去年と同じ服装でした。

今回、コートは引っ掛けずにちゃんと着ておりましたが、ハットは去年と同様です。

わかりやすいよつこしておいで、よかつたと思います。

その子の顔は、私を悲しくさせ、切なくさせ、あの人の事を思い出させましたが、やはり私はそれ以上に、何故か、本当に嬉しくなりました。

呼ばれたので、

「やあやあ、また会えたね」

と返しました。

私も嬉しかったのですが、彼女はそれ以上に嬉しかったようです。まさか、覚えていてくれたとは思いませんでした。

私も忘れませんでしたが。

また、3分だけの世界が始まりました。

「おじさん、ちょっと元気になつたみたい」

「そうか……そうだねえ。去年より少し元気になつたかもねえ」

その子は私を本当によく覚えていたのでしょう。

確かにそうでした。私は確かに少しだけ前を向いていたように思います。

今年は、好きなことを聞かれました。

私は素直に盆栽が好きだと言いました。

彼女は、趣味がなかつたそうです。

ですので、私が質問し返すと、困つた顔になつていきました。

無いというのも恥ずかしい乙女心、あると嘘を言つてしまつひとを避けたい人情。

そういうことだったのでしょうか。

また、去年と同じく別れました。

彼女はやはり一度振り向き、私に手を振りながら別れを告げました。
今回は、私は左手を振って、笑顔で彼女を見送りました。

しかし、やはりその後はその子の足あとは有りませんでした。

それが、5年も続くと、意味がわかつてきてしまいました。

灰 -11 (前書き)

本当になんだか適当になつてゐる。

その子は年を重ねる「」と、あの人に似て、いきます。
似ていくというのは、正しくありませんでした。
近づいていくのです。

私は、時をかけていたようです。

ただの夢だと一蹴しても良かつたのですが。
そう、良かつた筈なのです。

その子は、確かに私の妻でした。
その子が数えて18になる年の時、私は愛の告白と、このものを受け
ました。

私は、酷く苦しました。

私が愛したのはただ一人です。
私の妻だけです。

しかし、そこに若いころの妻がいるのです。
それを愛さずにはいられるでしょうか。

私は、悲しみを堪え、言いました。
彼女の好きな、笑顔で。

「『』めんよ、僕はその気持ちを受け取れない」

彼女は、どこか分かつていたような顔で、それを聞いていました。
でも、少しくらいは悲しいのか、私の目を見てくれません。うつむ

いていました。

「君にアホみたいに惚れ込む人間が現れたらそつと告白したらどうだい」

言いました。

ええ、私こそが、あの憎つべき中年なのですから。

私の憎んだ、仇です。私は私の仇です。

私は我慢しました。

彼女の未来の為に、私自身の過去のために、我慢しました。

彼女を離したかったわけがありません。

彼女に口付けたくなかったわけがありません。

ただ、堪えました。

私も随分、控えめになりました。

彼女は、その年も歩道を渡りました。

ええ、振り返つて、笑いながら手を振つてくれました。

幾分寂しそうな笑顔でしたが。

それを見て、僕は悲しくなります。

あの人気が悲しいと、僕も悲しいです。

でも、あの人人の笑顔は素敵だから、僕はどうしても、笑顔になってしまいます。

「おじさん、またね」

私は、左の手でぎこちなく手を振ります。

私は、ちゃんとその時も笑っていました。

私は、彼女に会えるから、生きてきました。

彼女が、いつもそこにいてくれるから。

でも、いつまでもそこにいてくれるわけではないことも、どうの

昔に気づいていたはずです。

私は、この不思議な夜の意味が分かつてから、ずっとと考えていました。

思い出と心中しよう、と。

あと5年で、彼女とは永遠に会えなくなります。

私は、あの時と今が繋がるその日に、自殺することを決めました。
死に損ないの死時としては、これ以上無いと思つたのです。

女々しいと笑つてくれても構いません。

弱い人間だと罵つてくれても構いません。

私には、彼女が居なくては始まらないのです。

もはや、彼女なしでは私ではありません。

意氣地なしと言えますが、それほどに彼女は私のすべてだったので
すから。

灰 -12 (前書き)

もうすぐ終わるはずである。

私は残り五年を、どう生きるか考えました。

不思議な夜のことは誰にも言つていませんでした。

だから、いきなり自殺したように思われるでしょうし、とりあえず、死ぬ前の身辺整理を5年かけてゆっくりとしていくことにしました。

12年間、長かったと思います。

ずっと、何をしていたのか、よく思い出せません。

でも、妻の墓にはあの後毎週参りに行っていました。

そして墓の世話をしていました。

悲しかったです。でも、そうしているのが自然なように思われたのです。

あの人を今も昔も思い続けていると、自分に分からせたかったのか
も知れません。

私は灰でした。

でも、生きていましたとも。ええ。

それからも、私はあの横断歩道に立ちました。

彼女は、私の知っているとおりに美しくなりました。

そして、彼女が大学の3年生の冬に、馬鹿な男の話を聞きました。

彼女の恋人の話でした。

「おじさん、私、付き合つ人が出来ました」

「そつかあ」

私は、万華鏡のように、よく分からぬ何か、しかし確実に美しい何かを感じていました。

妻と居た年月が、鮮やかに、光り輝くように私の心を再び、一瞬の

風のように通り抜けて行きました。

「馬鹿みたいに君のことが好きなのかい」

「うん、本当に、馬鹿な人」

彼女ははにかみながらそう言いました。
幸せいっぱいで、照れながら笑っていました。

「私の何もかもが好きだ、って。とっても、とっても恥ずかしかったけど……すごく嬉しかった。私しか見えてなくて、凄く切ない人危なっかしくて……そう、私が見てなきやつて思うの。ちょっと困っちゃうところはね、私が心配そうに見ていても、安心して見ても、絶対に頑張っちゃう所。もう……嬉しくて、心配で、どうかなっちゃいそ」

そう、赤裸々に語ってくれました。

照れます。こう、言葉にされたのはあまりなかつたので、そのとでも、私も嬉しかつたです。

また、いつもと同じように別れました。

その次の年、私はその歩道に立ちませんでした。
好き合う二人に、野暮な仇が入つてはいけません。

私も彼女も、その方がいいでしょう。

私は、最後に旅行にいくことにしました。

あの夜の彼女が、結婚した次の年の夏です。

妻の写真を連れて、色々なところをめぐりました。
随分と長い旅行になりました。

私の歩みは、少し早くなつていきましたが、それでも遅かったです。
長い、長い、旅路だつたように思います。

ゆっくりと、ゆっくりと歩きました。

私は、一人でしたが、最後にみやげ話ぐらいは持つていけるよう^に、
と思って。

新婚旅行で行つたところや、初めて一人で出かけた場所とかを、夏
が終わるまで、巡り続けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2077ba/>

短編の吹き溜まり

2012年1月8日21時48分発行